

私のおすすめ この1冊！

日本歯科評論 増刊 2013

画像撮影・診断の新たな展開

デジタルエックス線・CTのたしかな画像を得るための撮影法と診断のポイント

佐野 司 編著

A4 変判・156 頁・定価（本体 5,800 円＋税）

2013 年 10 月 19 日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

須崎 明

（愛知県北名古屋市／ばんだ歯科）

先日、ある歯科ディーラーのトップセールスマンから興味深い話を聞いた。最近の新規開業では、院内 LAN システムを構築してすべての画像データを様々なサーバーで確認できるという理由から、デンタルやパノラマエックス線はほとんどの場合でデジタル画像システムが採用されている。しかし、画像診断におけるデジタル画像の有用性を重要視して採用する例は少ないという。また、CBCT も時代の潮流を理由に何となく導入したいという歯科医師が増えているが、臨床であまり使用されていないケースもあるという。

このような開業時の無駄な初期投資を抑えるためにも、デジタル画像システムを導入するにあたっては、自分の臨床でデジタル画像をどのように応用していくのかを明確にする必要がある。そんな時、この本は大いに役立つはずである。

本書は「第Ⅰ章：画像撮影・診断の新たな展開」「第Ⅱ章：たしかな画像を得るためにおさえておきたいポイント」「第Ⅲ章：わかりにくい、見落としやすい画像診断のポイント」で構成されている。序文や第Ⅰ章の中で編者が述べているが、歯科の画像診断はパラダイムシフト（大きな枠組みの変化）が起こっている

という。大きな変化とは、デンタル・パノラマのデジタル化、3次元画像である CBCT の登場と一般歯科医院への普及、さらに今後は歯科においても普及が見込まれる遠隔画像診断などで、第Ⅱ章の中でアナログ画像とデジタル画像の違い、CBCT の特徴と臨床で適切に活用するための留意点、デジタルエックス線撮影のポイントなどが詳述されている。これらは、すべてたしかな画像診断を行う上で知っておくべき知識であるろう。

筆者の場合、エナメル質初期う蝕の診断はアナログ画像のほうが優位であること、患者の被曝を低減できるデジタル画像は1枚の静止画として捉えるだけでなく、様々な画像処理によりその有効性がより高くなることなどが、本書の明解な解説により再確認できた。

そして臨床家にとっては、“臨床編”である第Ⅲ章がやはり最も興味をひくところだと思う。「デンタル撮影のアナログで診断しやすかった症例」「デジタルで診断しやすかった症例」「デンタル（パノラマ）撮影で診断できなかったが CT で診断できた症例」など5つのテーマで分類されており、数多くの症例を通して画像診断のポイントと pitfall（落



とし穴）についてが豊富な写真でわかりやすく解説されている。本章を読むと、アナログ・デジタルそれぞれの有用性を理解して画像診断すること、また CBCT による 3 次元画像診断をすることで診断能力が向上することがよくわかる。

当院ではアナログ・デジタルそれぞれのメリットを活かすため、現在は電源のみで暗室がなくてもアナログデンタルエックス線を現像できる「Ring Ring 3」（ニックス製）を導入し、デジタルとアナログを併用して画像診断を行っている。また、約 3 年前に CBCT も導入し、様々な臨床への応用が可能のため日常臨床が大きく変わったことを実感しているが、本書は非常に参考になる内容が多く解説されており、新しく得た知識を明日からの診療に活かしていきたいと思っている。

エックス線画像のしくみ・構成についての解説など、専門的で難しく感じられるところがあるかもしれないが、本書を読む前と後では1枚の画像を見る目が変わっているはずである。診療の質の向上を図るためにも、ぜひ参考にしていただきたい一冊である。